

特242

131

弘法大師の宗教

高井觀海

新更會



始



特242
131



大師の宗教

高井觀海





弘法大師の宗教

智山専門學校長 高井觀海先生

一 序 言

私は昨年の夏期講習に般若心經の簡単な講義をしたのであります。般若心經は昔から彼の支那の慈恩大師とか賢首大師とか、さう云ふ人の見た般若心經と、我が弘法大師の見た般若心經とは全く違ふと云ふ事を申し上げて、弘法大師と云ふ方は我日本で御生れ遊ばされた方であるが、大師は實に古今東西に亘つての大宗教家であり大哲學者であり大藝術家であり大書家であり、實に大師は空前絶後、世界獨歩の人であると云ふ事を申し上げたのであります。般若心經をあのやうな獨創的な解釋をされると云ふ事は弘法大師に非れば出來ないと云ふ事を昨年申し上げまして弘法大師の偉大なる一端を申し上げたのであります。それで本年は引續いて弘法大師の宗教と云ふ題で弘法大師の御話をもう少し繼續的に申上げやうかと思ふて此の演題を出したのであります。前以て御断りして置きますが、私は眞言宗の僧侶であります。眞言宗の僧侶は眞言宗の祖師である弘法大師を無暗矢鱈に褒め散らかすと云ふ事は我田引水の感がある。聞き様に依ると大變日分の祖師を宣傳して居ると云ふ風に聞へるかも知らぬ。今日は夏期講習の皆様の前に於て私は自己の主觀的立場から御話するので無い。日本の文化史上又世界の宗教思想

想上に於て弘法大師と云ふ人は如何なる地位を占め如何なる見識があつたか、我々の日本に生れた如何に偉大なる人であるかと云ふ事を申上げるのでありますから、無私公平に皆様も御聴取あらん事を願ひたいのであります。

最近の我國の情勢は佛教復興の聲が非常に喧ましい、どう云ふ事から喧ましくなつたかと云ふと、日本精神と云ふ事が喧ましい、滿洲事變を契機として、左傾右傾の思想は何處やら影を潜めて、日本精神が喧ましくなつた。日本精神を段々掘つて見ると、どうしても儒教と佛教に進めて行かねば日本精神は充分に發揮して來ない。そこで段々儒教佛教の聲が喧ましくなつたのである。佛教研究の熱は相當起つて來ましたが、併し特に著しく佛教に關心を持つて居るのは今や陸海軍の軍人でありませう。軍部は日本精神の第一線に立つて居るが、軍部は特に佛教研究に熱心であります。何れの階級の人も佛教研究熱はあります、しかし特に陸海軍々人は佛教に對して關心を持つて居るやうであります。併ながらそれに應ずる人が無い、近頃私は甚だ遺憾に思ふのは、一體何が佛教かと云ふこととあります、佛教と云ふものは宛も水のやうなもので、器の方圓に従つて其形を變へる、水は圓い器の中へ入れると圓くなり、四角い物に入れると四角になり、三角な入れ物に入れると三角になる。水は器の方圓に従つて其形が變る。佛教もそれと同じものであつて、印度の國體風俗人情に當嵌めれば印度佛教が出来る。支那の國體風俗人情に當嵌めれば支那佛教が出来る。日本の國體風俗人情に當嵌めると日本佛教が出来る。一つの佛教も其國體風俗人情の器に依つて色々形を變へる。是は大變大切な事である。それでありますから日本の佛教を直ちに亞米利加へ持つて行つても間に合はぬ。亞米利加には亞米利加の佛教と云ふものが出来ねばならぬ。斯様に

佛教は其の國體風俗人情に依つて其の色形を變へて居ると云ふこととあります。そこをハッキリせずに漫然只佛教と云ふても何が佛教か分らぬ。最近我國の學者は主として原始佛教、印度佛教の研究が盛んで、延いて支那佛教の研究が盛んであつて、日本佛教の研究が足らぬ。語を換へて言ふと祖師佛教の研究が足らぬやうに思ふ。私は日本の國民を指導するものは日本の祖師佛教であつて印度佛教でも支那佛教でも無い、印度佛教や、支那佛教を何百年研究しても我日本の思想を救済する事にはならぬ。日本を救ふものは日本佛教である。日本の祖師に依つて開かれた佛教に非ざれば日本を救ふ事は出来ない。日本の國民思想を指導するものは日本の祖師に依つて立教開宗された天台宗であるとか眞言宗であるととか日蓮宗であるととか淨土宗であるととか眞言宗であるととか云ふやうな日本の佛教である、現在の我が日本の思想界を指導するに印度の佛教や支那の佛教を持つて來た所が何の役にも立たぬ、是が私の根本的な立場であります。それでありませうからして、私は今皆さんに此の日本精神の復興する時に當りて何處へ眼を着けて行かねばならぬかと云ふと、我等の祖先の奉持し來つた日本佛教と云ふものを第一に研究して貰ひたい。弘法大師の開いた眞言宗、傳教大師の開いた天台宗、法然、親鸞、道元、榮西、日蓮夫等の御開きになられた宗旨を先づ研究する事が大切であります。般若經を研究して見たり、或は阿含經を研究して見たり、そんなものを研究する事が佛教研究だと思つたら大間違である、祖師の眼に映じた佛教を調べ、しかし直接自分の思想生活にこれを内觀することが大切な事である。之を私は常に痛感して居る者であります。そこで私は日本佛教、特に弘法大師の御開きになつた宗教と我日本國民精神と云ふものとどう云ふ密接な關係があり又現在に於ても將來に於ても如何に必要なかを皆さんと御相談して見たいと思ふ。これを御話する前に先づ傳教

大師と弘法大師との佛教觀の相違を一言御話申上げねばならぬ。どう云ふ譯であるかと云ふと日本佛教は南都六宗と申しまして平安朝以前に俱舍宗とか成實宗とか律宗とか華嚴宗とか三論宗、法相宗と云ふやうな奈良に六宗と云ふものがあつた。奈良の六宗は印度佛教若くは支那佛教であつた、三論と法相とは印度で出来た宗教。華嚴宗は支那で出来た宗旨であります。さう云ふ印度で出来た宗教、支那で出来た宗教が奈良朝時代に盛んに傳はつて居つたのであります、けれ共、支那や印度で出来た宗派を我國に、輸入して見た所が直接日本に役立たぬ、平たく申しますると耶蘇教でもさうです、耶蘇教は結構な宗教でありませう、しかし亞米利加の耶蘇教や獨逸の耶蘇教其儘の耶蘇教では我國に間に合はぬ、所謂日本耶蘇教でなければならぬ。それと同じ様に奈良朝時代に印度佛教や支那佛教は盛んに傳へられたけれ共、日本では間に合はぬ、そこで日本人の宗教日本人の佛教と云ふものが必要である、日本佛教の初めて生れたのが平安朝の初期であります。即ち傳教大師、弘法大師に依つて開かれた天台宗、眞言宗と云ふ二つの宗旨は全く日本人の手に依つて初めて日本に日本佛教を生んだのであります。御二人共實に偉い人で、傳教大師は五十六歳で御隠れになつた。此の傳教大師は十九歳の時に、あの比叡山に登つて二十二歳で根本中堂を御建てに成つた、三十七歳の時に支那へ行き、さうして御一代の間に所謂日本天台宗と云ふものを御開きに成つたのであります。人間は八十も九十も生きて居る、百まで生きて居つて醉生夢死、何も仕事を能うせぬ人が多い。傳教大師は僅かに五十六歳の御生涯であつたけれども日本佛教の開祖として天台宗をあの比叡山上に開き、國民を教化し給ふ。洵に天台宗の開祖傳教大師は我が日本の文化史上に於ける大恩人であります。此傳教大師と相前後して出られたのが弘法大師である。弘法大師は傳教大師よりも五つ六つ後輩であり

ます、弘法大師の方が若い。傳教大師が御隠れになつた時に弘法大師は確か五十位であつたと思ふ。殆ど同時代の後輩であります、此傳教大師の開いた天台宗と弘法大師の開いた眞言宗とどう違つて居るかをハッキリして置く必要がある。弘法大師は二十歳で坊さんになつた。私は十歳位で坊さんになつた、本當はなりたと思つてなつた譯で無く大きくなつたら坊さんになつて居つた。親が私を坊さんにしたのであります。私も在家で生れたのであります。親が大變弘法大師信者で毎日のやうに南無大師遍照金剛を唱へ、私を大師さまの弟子にせねばならぬと云ふので坊さんにした、大きくなつたら私は大師さまの弟子にして呉れてあつたのであります、大變喜んで居りますが、此の弘法大師の出家については親族間に相當反對がありました。今も残つて居りますが弘法大師に三教指歸と云ふ本がある。儒教、道教、佛教の三教を批判的の立場から書かれたものである、弘法大師が十八歳の時に書いたと云ふ説もあり二十四歳と云ふ説もある、何れにしても二十前後にあの名文を書いたのであります。三教指歸を讀んだ文でも如何に弘法大師が青年時代から非凡の人であつたかを窺ふことが出来る。この三教指歸と云ふものは何の爲に書いたか、自分は斷然坊主になる、親類が反對しやうが何と言はうが佛教に非ざれば日本の思想界を指導する事は出来ぬ。儒教や道教では根本的に人生の解決は出来ない、かう云ふ立場に於て斷然出家の宣言をしたのが此の三教指歸であります。さうして自ら出家の宣言をして二十歳の時に自ら進んで坊さんになつたのであります、さうして殆ど十年間は苦修練行、自ら身を磨いて延暦二十三年、即ち三十一歳の御時に支那へ行き、惠果和尚から法を傳へて大同元年、三十三歳で日本へ御歸りになつて此の眞言宗を御開きに成つたのである、さう云ふ話をして居ると限りが無いから今最も簡単に弘法大師の開いた眞言宗と、傳教大師の開いた

天台宗とを比較して其の立場の相異を申上げまじやう。傳教大師の佛教觀は顯密一致、大釋同體の立場に立つて居るのである。弘法大師の佛教觀は顯劣密勝、大釋別體の立場である。顯教も密教も一つであると云ふのが傳教大師の見方であり、大日如來と云ふ佛様も釋迦如來様も同じ佛様、同體である。此御釋迦様の説いた顯教と大日如來の説いた密教とは一つであると云ふのが傳教大師の佛教觀である。弘法大師の佛教觀は大日如來と御釋迦様とは違ふ佛様である。大日如來は法爾法然、超歴史的の佛様であり、御釋迦様は歴史的の佛様であり、釋迦の説いた顯教と云ふものは教としては劣等な教である、大日如來の説いた密教が優れた教である。傳教大師と弘法大師の二大高僧が平安朝の初期に現はれ、此の如く根本的に其の佛教觀を異にして、一は天台宗を開き、一は眞言宗を開いたのであります。いづれも支那や印度の佛教では日本の中に合はぬ、そこで日本佛教を建設しやうと努めたのであります。傳教大師と弘法大師とは佛教に對する見解が違ひ立場が違ふ。そこで弘法大師の佛教を知る爲には顯教と密教と云ふことを一通り知らないとはハッキリ分らぬ。

二、顯教と密教

顯教とは何であるか密教とは何であるかを一通り心得たならば、弘法大師の佛教觀と傳教大師の佛教觀の相違がハッキリ分つて来る。傳教大師の御考へに依れば佛教と云ふものは印度の御釋迦様の説いたものだ。假令大小顯密、色々差異があつても佛教は釋迦の法門の外に出でない。言葉を変えて云へば傳教大師は釋迦中心主義である。佛教は八家九宗に分れても所詮御釋迦様の法を出でない、華嚴阿含方等般若法華涅槃の一切法門は皆釋迦の説法ならざるものは無いと云ふのが傳教大師の考へ方である。即ち釋迦中心主義である。所が弘法大師は釋迦の

外に大日ありと云ふ考へ方である、釋迦中心主義に對してこれを大日中心主義と申上げて宜いと思ふ、大日如來と云ふ佛が佛の本家本元で、御釋迦様はこの大日如來の流現に外ならぬ、大日如來が印度に現はれて釋迦如來となつた。御釋迦様は大日如來の影である、其大日如來と云ふ佛様は超歴史的の佛であつてその一分の働きが釋迦如來である。大日如來は諸佛諸菩薩の本家本元である、釋迦は其の影像に過ぎぬ、部分の佛様である、全體と部分とは違ふ、弘法大師はかう云ふ御考であるから大日中心主義の行き方である。此の大日と云ふ言葉は印度の言葉で言ふと毘盧遮那である、今の梵語學が翻譯して遍照と云ふのが一番正しいと云つて居る、これを大日とも翻譯するのである、毘盧遮那と云ふ本佛が宇宙の根本體である、阿彌陀様も御釋迦様も觀音様も勢至様も不動様もあらゆる佛様は皆此毘盧遮那の現れで無いものは無いと云ふのが弘法大師の佛教觀である。しかれば毘盧遮那と云ふのはどう云ふ佛様であるか、日本の國に於て考へれば、長多いが天照皇太神である、天照皇太神を大日靈貴と云ふ、我が國は此大日靈貴の本國である、大日本帝國、即ち大日如來の本國である。毘盧遮那の本國である、弘法大師は大日本帝國は天照皇太神を中心とした國であり毘盧遮那を中心とした國である、弘法大師の立場は神即佛、佛即神である。斯う云ふ御考の下に眞言宗と云ふものを開いた。印度の佛教や支那の佛教では未だ曾て言はない日本佛教が弘法大師に依つて初めて開かれたかと思ふ。弘法大師の佛教觀は彼の傳教大師の大釋同體、顯密一致に對して大釋別體、顯劣密勝を主張したのであります。御釋迦様の説いた法門は方便教であつて、大日如來の説いた法門こそ眞實教である。この大日中心主義の佛教は日本佛教として最もハッキリしたものでは無いかと思ふ。我が弘法大師の根本思想は日本中心主義であり、日本を以て毘盧遮那の本國即ち天照皇太神の本國とする

のであります、しかしして我國に理想の淨土を建設しやうとするのが弘法大師の立場である、大師は實に國家中心主義、皇室中心主義所謂鎮護國家主義の教を弘められたのである。其根本は茲に出發して居ると思ひます。故に私は傳教大師も日本佛教建設者である弘法大師も日本佛教建設者であるが、此の兩大師の佛教觀と其の根本的立場は全然違ふことを注意せねばならぬと思ふ。然らば顯教と密教とは何處が違ふかを御話しなくてはならぬ。顯教と密教と云ふ事を専門に研究するには弘法大師の辯顯密二教論、祕藏寶鑰、十住心論、其他興教大師の顯密不同章、顯密不同頌、五輪九字祕釋、さう云ふ本に依つて研究せねばならぬ。

興教大師の顯密不同章と云ふ本の中に顯教と密教とを嚴密に調査すると無量無一の區別がある。それを略しても一萬の不同が有ると言ふて居りますから逆も數へ切れたもので無い。興教大師と云ふ方は弘法大師の教を弘めた人で、平安末期に出た方である、興教大師は惠果和尚の御再來で我が宗祖弘法大師とは、互に弟子となり師匠となつて此の眞言宗を弘めた方であります。其興教大師の書いた顯密不同章の數ヶ條を書いて皆さんの御參考に供し、これに依りて顯密の相違を心得て頂きたいと思ひます。

顯應化身說	密法性佛談
顯隨他意說	密隨自意說
顯因分可說	密果分可說
顯無明分位	密大日遍明
顯一心爲本	密三等爲宗

顯斷障得道

密即惑成佛

斯う云ふ顯密の相違を數十句列べてありますが、此數箇條丈けでも顯密の差別は略々附くかと思ふ、説明する必要もありませぬけれども初めての人もありませうから、極く簡單に此事を御話申上げて見やうと思ふ。顯、應化身、說と云ふのは顯教は歴史上の釋迦の說法であり、密教は超歴史上の毘盧遮那佛の直說であつて、第一に其の能說の教主が違ふと云ふことであります。次に顯、隨他意說と云ふのは御釋迦様の說法は他の意樂に隨應した說法である、従つて方便をまじへた教へであるが、密教の大日如來の直說は自分の悟りの儘を披瀝し、少しも方便を雜へ無い眞實の教である、顯教と密教とは隨他意と隨自意の區別がある、次に顯、因分可說と云ふ、因分とは因位の分齊で現象世界であります、顯教は因分可說、果分不可說を基調とし、果分の世界は言斷心滅、説くことは出来ぬと云ふ、處が密教の大日如來は如義言說を以て其の本體世界を説いたのである、顯教と密教とは果分可說、不可說の相違がある。次に顯、無明、分位と云ふ、無明は迷妄の分際である、各々當位に於ては悟つて居る積りであるが、密教より觀れば尙無明の分齊である、大日遍明の世界を實現するのは獨り密教のみである。次に顯、一心爲本。と云ふのは、顯教は一心が本になる、所謂心本色末である、處が密教は三密齊等の教へである、次に顯、斷障得道と云ふ、顯教では障を斷じて佛に成る、ところが我が密教は不斷煩惱得涅槃、この身この儘で佛になる、こう云ふ風に列べて行くと顯教と密教とは根本的に其の教義の建前は違ふ事が御分りになつたかと思ふ。我が日本佛教の根本中心思想は此の密教でなければならぬと云ふのが弘法大師の見方である。

三 密教と眞言宗

傳教大師の立場は顯密一致であり弘法大師の主張は顯劣密勝である、斯う云ふ風に佛教觀が違ふのでありますが、其のいづれが正しいか否かはこゝで彼れ此れ批判してはならぬ。傳教大師の佛教觀を信奉するものもあれば、弘法大師の佛教觀を優れて居ると云ふものもありましたやう。私は今日本佛教の開祖である傳教弘法の二大高僧は其の佛教觀に根本的相違あることを注意し、更に進んで、其の密教と眞言宗の又違ひを考へて見なければならぬと思ふ。世間には密教と眞言宗とを一つにして居るものがある。これは甚だ遺憾な事である、密教は印度にもある。支那にもある。日本にも密教と云ふものはある。所が眞言宗は印度にも支那にも無い、これは獨り日本丈けにしか無い。印度に眞言宗は無い、支那にも無い。弘法大師に依つて初めて我國に眞言宗と云ふ宗旨が開かれたのである、それであるから眞言宗を直ぐ密教と云ふ譯にはいかない。勿論眞言宗は印度、支那、密教の系統を相承して居るからこれを一緒にして眞言秘密の法と云ふから密教即眞言宗だと考へる。相當の學者でも眞言宗の異名としてこの密教の言葉を採用して居る、眞言宗の教義書を書いて密教概論と云ふ。我が宗祖弘法大師の苦心し給ふ所を味つて居ない、密教が眞言宗だと思つては大變な間違ひである。日本には眞言宗も密教も共にある、今私共は日本佛教として味ふべきものは單なる密教でなく、弘法大師の開き給ふ眞言宗である。前に申上げたやうに、傳教大師は顯密一致、大釋同體と云ふ立場から、日本佛教を建設しやうとし、弘法大師は顯劣密勝大釋別體の立場から日本佛教を建設しやうと云ふので二つの行き方は違ふ。しかし此二つが平安初期の新宗教として現はれ、鎌倉時代の新宗教まで影響したのであります、私は今其の日本佛教としての眞言宗の特色を數ヶ條列挙して見やうと思ふ。

四、眞言宗の特色

第一は弘法大師の宗教は包容主義である、元來宗教と云ふものは排他的のもので彼の耶蘇教徒は耶蘇教以外のものを異教徒として排斥する。耶蘇教の教會に参りますと耶蘇教徒は互に兄弟として仲が好い、併し耶蘇教以外の者は異教徒として極端に排斥する、白人種が黄色人種を侮辱するのは此の排他的宗教思想が多少原因して居るかと思ふ。獨り耶蘇教徒のみで無い、回々教も佛教も矢張り宗教だから多分に排他的氣分は濃厚である。淨土門は聖道門を排斥し、各宗の間に所謂宗旨の勝劣争ひは相當にある、是は宗教の一特色で、信仰と云ふものはたしかに一方に片寄り易いのである。所が弘法大師の宗教は排他的で無い、極めて包容主義である。一例を申しますれば、大師の教判である、彼の十住心教判を拜見すれば世間の教も出世間の教も皆這入つて居る。儒教も這入つて居れば道教も這入つて居る。弘法大師が今立教開宗すれば、那蘇教も回々教も、天理教も有りと有らゆるものを皆取入れて、さうして一つの思想體系を作られたに違ひない。凡そ佛教の教判を觀るに賢首大師の五教十宗にしても天台大師の五時八教にしても佛教中の教理淺深を判じたものである。佛教以外の儒教道教、世間の教まで教判に取入れたと云ふのは弘法大師に至つて初めて出來た教判である。平たく言へば弘法大師は非常な包容主義の立場に立つて居る、一切を包容して行かうと云ふ行き方である。併し是は弘法大師の特色と云ふよりも寧ろこの包容主義は日本民族の特色では無いかと思ふ。我々は既に支那朝鮮の文明を日本に取入れ、しかもこれを我物にして居る、歐米の文化が這入つて來れば亦それを取入れて我物にしてさふ。日本民族は古今東西の文明を取入れ、包容し、それを消化して自分の物にして行かうと云ふ、日本民族は實に包容性に富んだ民族である。弘法大師の

十住心教判と云ふものは世間出世間の有らゆるものを一つの範疇に取入れてこれを體系化す所に我が民族性の特色を十分に發揮して居ると思ふ。

第二の特色は統一主義である、弘法大師の教判は世間出世間のあらゆる思想を取入れてあるが、それが雜然として包容されて居るかと思ふにさうでは無い。そこには必ず系統があり統一がある。一切を包容して而もそれに一つの系統を與へ、組織化して居る。假りに前に申しました十住心にしても、只單に列べたのでは無く必ず從淺至深、淺いものから深いものへと順序を立てて居る、而も背暗向明、暗い方から明るい方へ上次第の順序を附けて居る。更にこれを曼荼羅に於て見るに一見曼荼羅は雜然と佛様が列んで居るやうに思はれるが、金剛界には千四百六十一尊、胎藏界には四百十四尊の佛様が次第順序があつて排列されて居る。金胎の佛様は實は無量無邊である、けれ共要するに先程申しました毘盧遮那と云ふ佛様の現れならざるは無い。さうすれば毘盧遮那を中心として統一されて居ると云ふ事が御解りであらう、如何に眞言宗の教理は包容主義であり統一主義であるか御解りのことと思ひます。前年此の夏季講習のあつた時に我が天照皇神は大日如來であると言つたのは新義眞言宗の開祖興教大師が初めであると山本博士は文献の上から考證されたやうに記憶して居る。成程文献の上ではさうであるかも知れぬ。けれ共、弘法大師の立教開宗の根本精神は、全體大日本帝國は大日靈貴の本國である。即ち神佛一體の根本的立場に立つて居るから弘法大師は既に天照皇太神中心主義である。即ち日本の國體を中心にして行くのが弘法大師の根本的立場であります。故に眞言宗程神祕を祭る宗旨は無い。眞言宗の御寺には皆神様を勧請して居る、しかして神明法樂を捧げて居る、弘法大師の宗教はさう云ふ一つの特色を持つて居る。此の統

一主義も獨り眞言宗の特色であるのみならず是は日本民族の特色では無いかと思ふ。日本民族御互は他所のものを持つて來てこれを我國に應ずるやう組織化し、日本文化と云ふものを直きに建設する、物質文化でもさうだ。汽車でも電車でも外國から眞似て來たには違ひないけれ共日本特有の發明をして日本特有の文化を生み出す、それが日本人の特色であると思ふ。

第三に弘法大師の宗教の特色は神變主義である、神は不測の義。測られざるを神と云ふ。我々普通の常識で分らぬ事を神と云ふ。是はコップだ是は机だと云ふのはそれは神では無い、それは人間の判断の出来るものだ、實に神祕的にして我々に想像の附かないものを神と云ふ。又常に異なるを變と云ふ。我々の平素の状態から變つた事を變と云ふ、變だなど云ふのは常に異つて居るからである。不測にして常に異なる、即ち不思議の感に堪へないものを神變と云ふ。私は宗教は神變主義でなければならぬと思ふ。弘法大師の宗教は神變主義である。是は今日の科學萬能の人が最も嫌ふ。科學萬能の現代人は神祕、奇蹟、不思議と云ふ事を非常に嫌ふけれ共宗教と云ふものに不思議が無かつたら私は宗教の必要は無い。宗教は決して倫理でも無ければ哲學でも無い。我々の常識や判断で以て分る程度のもは宗教ぢや無い。それは倫理であり哲學であるかも知れないけれ共宗教では無い、宗教と云ふものは必ず神祕奇蹟で我々には分らない、さう云ふ事實が現はれて來ると云ふ事が宗教の特色でなければならぬ。私は宗教は神變主義で、奇蹟を認めなければならぬと思ふ、弘法大師は盛んに之を主張した。例へば息災法と云ふものがあつて惡事災難を止めて無病息災、不動さん觀音さん等の佛を拜むと第一惡事災難を逃がれる。病氣に罹らない、達者である。七難即滅七福即生と云ふ不思議な御利益を受ける。又増益法と云ふのがある

敬愛法と云ふのがあり調伏法と云ふのがあり延命法と云ふのがある。生命を長くし自分の敵を降伏さす。例へば戦争でも始まると敵國降伏の祈禱をやる。又貧乏人が金持になる。金持で人の敬愛を受け敵を降参さして長生する。そんな好事は無い。息災、増益、調伏、延命の利益を興へて呉れないやうな神佛であつたならば私は神佛として拜む必要は無い。私が神佛を信心するのは矢張り信心すれば息災であり敬愛され有福であり延命であるから私は信心する、私が天照皇太神を拜み不動様を拜み、信心すれば斯う云ふ利益がある、我々の常識では説明は出来ぬ、けれ共事實さう云ふ利益がある。即ち神變である、神佛を信心すれば必ず悪事災難を逃れる、これが一つの宗教の特色で無ければならぬと思ふ。是が無いやうならば宗教ぢや無い。現に弘法大師は勅命を奉じ神泉苑で雨乞をした。兎に角雨乞をすれば雨が降る、又雨を止めやうとすれば止る。さう云ふ色々の秘法がある、其秘法を修すればそれが事實の上に現はれる、私共は宗教の神秘力と云ふものを認めなければならぬ、弘法大師の眞言宗は神變主義の宗教である。弘仁九年に、天下疫すとあつて日本に悪病が流行した、其の時に我が弘法大師は悪病退散の祈禱をして現前に不思議の利益を興へた、さう云ふ不思議を認めるのが眞言宗の特色にしてこれを私は神變主義と云ふのであります。嘗に世間の利益丈けで無い、出世間の利益、即ち即身成佛と云ふ事も一つの神變である、旨い物は食ひたい、朝寝がしたい、遊びたいと云ふ煩惱を持つた者が、此身此儘で直ぐに佛に成る、大人格を實現する、是は實に神變不可思議の事實である。弘法大師の如き偉大な人格、或は御釋迦様のやうな偉大な人格も歴史的事實として現はれて居るから、此の即身成佛は決して不可能で無い。父母所生身速證大覺位と云ふ。是は出世間の利益である。世間の利益と出世間の利益この二つの利益を興へるのが眞言宗の特色である。

唯眞言法中即身成佛、即身成佛と云ふ事は眞言宗の專賣特許であります。眞言宗で無ければ即身成佛は出来ない。唯眞言法の中のみ即身成佛と云ふ事が許されて居る。

次に第四の特色は鎮護國家主義である、近頃は國體問題がやかましいが、日本の國體即皇室である、皇室の外に我が國は無い、これは我が眞言宗の立場である。國民として大事な事は國家即ち皇室。皇室即ち玉體、一天萬乘の大君、其儘國家全體である、これを一つに見て行くのが眞言宗の國家觀であり皇室觀である。故に眞言宗の御祈禱の時は必ず玉體安穩寶祚長遠。天皇陛下の御尊體は御安泰である様、寶祚は長遠である様にと祈る。さう云ふ立場から眞言宗は御祈禱をし我々も亦毎朝毎晩拜んで居る譯であります、御大師様の御遺告を見ますと御一代の間に平城、嵯峨、淳和、仁明の四朝を經、其の間に國家の奉爲に壇を建て法を修する事五十一ヶ度とある。即ち建壇修法五十一ヶ度、我弘法大師は勅命を奉じて國家安泰玉體安穩の御祈禱をして居る、勿論其他の祈禱は何萬遍であるか分らぬ。眞言宗は大體祈禱宗であり鎮護國家の宗教である。我が御經を読む時必ず鎮護國家を念願して行くのである、眞言宗の寺院は鎮護國家の道場であると申上げて差支無い。餘談になるが祈禱に付て一言申上げて置かねばならぬ。我が宗祖弘法大師が嵯峨天皇の御病氣の時に祈禱をした文献があるが、其文言の一節に奉進加持神水一瓶。願添藥石除却不祥とある、僅かな文字である、けれ共味ひがある、私は天皇陛下の御病氣と承はつて恐懼に堪へぬ、付ては御祈禱を致しました、其御祈禱の靈水を献上致しまするが、此靈水ばかりではいけない。願くば藥石に添へて不祥を除却し給へ、御藥と共に召上つて下さいと云ふ意味である。こゝが大事である。眞言宗は祈禱だ、祈禱さへすれば病氣は直ると云ふのでは無い、祈禱と共に矢張り藥を進めるのが眞言宗

の立場である、或宗旨の如くナニ薬は要らぬ御醫者様は要らぬ、拜んでさへ居れば病氣は直る。一體病氣は人間世界には無い、或宗教の如きはそんな事を言つて居る。神様へ御奉公が足らぬから病氣が起ると云ふ。我が眞言宗はさう云ふ事は云はぬ。御加持の水即ち神水を献上するが薬を吞んで下さい、兩方共に用ゐて病を除去すると云ふのが眞言宗の祈禱の行き方である。此世界に人間と生れた以上生老病死と云つて病もあり死ぬ事もある、病は本來無いと云ふのは間違ひだ。今の科學者の多くは藥萬能主義で信心する氣は無い。しかし藥と信心と兩方相待たねばならぬ。眞言宗の祈禱はさう云ふ迷信的の祈禱でないと云ふことを申上げて置く。モウ一つは隻脚不能歩。一手不爲拍必由彼此至誠致感應。片手では音は出ない、二つの手を叩けば音が出る。片足では歩けない二つ足があつて歩ける。一生懸命に神佛を信心すると共に一方では一生懸命に藥を吞む。兩方相待つて始めて神佛の感應がある。藤原良房卿だつたと思ふ、弘法大師にどうぞ一つ祈禱して貰ひたい、畏入るけれ共私の家に来て貰ひたいと言はれたが弘法大師は御行きにならぬ。法力に遠近無し、千里則咫尺、お前の家へ行つて拜まぬでもこの山で拜んで、病氣は直る、と云ふ事が歴史上の事實として傳へられてある。斯う云ふ文獻から考へて見ますと眞言宗の祈禱は非常に高尚な而も一方に偏しない祈禱であることが御承知になる事が出来やうと思ふ。

第五に眞言宗は文化主義だと云ふ事を申上げて見たい。大體弘法大師は現世主義である、未來往生と云ふ事は餘り言はない、現實の我が日本國土に文化を建設しやうと云ふのが弘法大師の行き方である。一例を言へば弘法大師は國字を作つた。以呂波を作つた。此頃はアイウエオをも作つたと言ふ。平假名片假名は大師様が作つたのちや無いと云ふ學者の間に説もありますけれ共大體以呂波は弘法大師が作つたものである。片假名も弘法大師

の作だと云ふ學者が多い。私は兩方共大師の作だと信じて居ります。大師に非れば以呂波は作れない、大師に非ざれば五十音を作ること出来ぬと思ふ。國字を作ると云ふ事は精神文化の本で、容易な事ではない。しかして弘法大師は教育に熱心な人であつた。弘法大師の時分には王侯貴族の學校はあつたけれ共平民の學校は無かつた。だから一般の者は教育を受ける事が出来なかつた。弘法大師は綜藝種智院を作つた、一般民衆に教育を普及させやうと云ふのがその根本方針である。國民教育即ち小學校の普通教育を初めたのは弘法大師だと言はねばならぬ、大師は實に教育の普及を圖り國民文化を高めやうとした事は事實である。又産業方面にも非常に働かれた、それは數限りなくある、御承知でありませう、例へば池を造つたとか井戸を掘つたとか、農業、産業の方面にも活躍された。傳ふる所に依れば我國で石油を發見したのは弘法大師だと云ふ説もある、越後へ行くと火のともる水と云ふて石油を御大師様が發見したと傳へて居る。御大師さんが九州を旅行した時、ある老人の所へ泊めて貰つた、其の時老人は木屑を集めて火を焚いて呉れた、大師はそれに感激し、翌朝旅立つ時に、老人に謝意を表し、昨夜は木屑を集めて火を焚いて貰つたが、木屑ばかりが燃料では無い、お前の門先の黒い石も燃料になるのだと大師は教へた、九州の炭鑛と云ふのはそれが本だと云ふ傳説がある。其の石炭の事をゴヘダと云ふのは其の老人の名前が五平太と云つたのでそこで石炭の事をゴヘダと言ふのだと傳へられて居る。大師は種々の方面に文化を開發し給ふ、現在の風呂にも湯風呂蒸風呂の二通りある、大師様はさう云ふ風呂も御作りになつたと傳へられて居る、御茶でもさうだ、御茶は大師以前からあつた、けれ共これを製して吞めるやうにしたのは弘法大師である、數へ来れば大師は實に産業方面に於ても多大の功績がある。建築から申しまして所謂仁弘式の建築は大師

獨得の建築である。繪畫に於ても彫刻に於ても書道に於ても大師は有らゆる方面に特色を發揮して居る。

五 結 論

大師は大宗教家であり、大教育家であり、大藝術家であり、有らゆる方面に多大の功績を顯はして居る、ことに大師の開いた眞言宗と云ふ宗旨は以上申し上げた如く五つの特色を持つた宗旨である。即ち眞言宗は鎮護國家主義であり神變主義であり、包容主義であり統一主義であり文化主義である。詳細の事は建築の方面或は繪畫、書道其の一つだけでも數時間を費さねばならぬ、本日は弘法大師の御開きに成つた眞言宗は此の如き特色を持つて居る事を申し上げ、これを印度支那の密教に較べて見るに印度の密教支那の密教は彼の顯教に對して優れたものであるが、弘法大師の眞言宗に比較せんか印度支那の密教と云ふものは未だ此の如き特色を發揮するに至ら無い、この眞言宗は實に日本中心主義の下に開かれた日本佛教である。鎌倉時代の法然、親鸞、日蓮等の開き給ふ日本佛教は此の傳教、弘法の佛教から派生して來たものである。傳教大師の日本佛教、弘法大師の日本佛教、それが日本精神を養ふ上に如何に多大の影響を與へて居るか、特に弘法大師の日本中心主義の眞言宗は日本精神涵養の上に非常な功績を残して居る事は、これに依つて御解りであらうと思ふ。白河法皇は大御室親王に仰せられ給ふ御言葉に法を弘め國を守る高僧古今多しと雖も、我邦に特に恩深きこと高野大師に過ぎたるは無し、高野大師と云ふのは弘法大師の事である、洵に畏多い、難有い御言葉であります。

眞言宗は單に眞言宗檀信徒のみの眞言宗では無い、世界獨歩の大思想家、大宗教家、大哲學者、大藝術家たる弘法大師と云ふ偉大なる高僧に依つて我日本文化史上、大師に依りて日本佛教が完全に開かれたと云ふ事を私は

禮讚し、此講演の主旨としたのであります、私共は之を契として弘法大師の宗教を段々深く味つて自分の生活に資して見たい、又皆様に御願したい。未だ少し時間はありますが此頃聲を痛めて居りまして甚だ御聞き苦しい話でありますから此位にして御免を蒙りたいと思ひます。

昭和十一年一月八日印刷
昭和十一年一月十日發行

新更論集分冊
定價金十錢

編輯兼
發行者

神崎照惠

千葉縣成田町一番地

印刷者

宮内利平

東京市京橋區寶町
二丁目七番地

發兌

千葉縣成田町一番地
新更會刊行部

終

6